一般演題（1B6-4）

臨床心理士による遷延性意識障害者家族への心理的支援に関する一報告

日比野　ゆかり、宇津山　志穂、浅野　好孝、篠田　淳

木沢記念病院 中部療護センター

【はじめに】遷延性意識障害の患者家族における心理的負担は重いと考えられる。しかし、遷延性意識障害の患者家族に対する看護師（Ns）による心理的支援の報告は多数あるものの、心理専門職による報告例は少ない。今回、臨床心理士（CP）が支援を行ったため、報告をする。

【対象】クライエント（Cl）は40代女性。第二子（10代）が、交通外傷により遷延性意識障害となり、受傷から5ヶ月後にリハビリ目的で当院に転院。付添いのため、県外から3回／1週程度、来院していた。

【支援経過】第二子入院後2ヶ月時から6ヶ月間（計9回）、家族の心理的支援として継続面接を行った。

面接初期（#1～#2）は、当院への不満・要望、第二子の状態への心配、自身の健康に関する話題が中心であった。CPは傾聴しつつ、当院の対応についてはNsと連携を取るなどし、環境調整を行った。

面接中期（#3～#6）は、第二子の症状、自身の健康と社会との関わり、裁判や住宅改装などの現実的問題に関する話題が中心であった。CPは共感的姿勢を保ちつつ、Clの健康面については、指示的に関わる部分もあった。

面接終期（#7～#9）は、ネガティブな事象であっても、肯定的に捉えなおす発言が増え、Clの困り感の低下が認められたため、面接は終結となった。

【まとめ】自身の健康、第二子への思い、現実的問題が主なテーマであった。CPが、共感的姿勢を保ちつつ、テーマによって対応を変えることで、Clの困り感が低下したと推測される。

今後、更なる実践を行うことで、遷延性意識障害の患者家族に対する臨床心理士による支援の有用性と限界を明らかにすること、遷延性意識障害の患者家族に特有の心理的負担等を見出していくことが課題である。